魔法戦記リリカルなのは The technical test team

委員長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法戦記リリカルなのは　Ｔｈｅ　ｔｅｃｈｎｉｃａｌ　ｔｅｓｔ　ｔｅａｍ

【Ｎコード】
Ｎ５５７４Ｗ

【作者名】
委員長

【あらすじ】
新暦６５年……
六年間の技術学校を卒業した主人公「ツバサ・ヤマザキ」１２歳。
彼は時空管理局地上本部技術試験課へと配属となり、第６３技術試験隊「インフィロット」に所属する事になる。
インフィロット隊の個性的なメンバー、そして数多くの試作兵器やその関係者達の織り成す魔法戦記が今、始まる……

プロローグ「インフィロット」（前書き）

コンセプトは「なのは版ＭＳイグルー」。

「魔法少女リリカルなのはシリーズ」のようなほのぼのとしたシーンや迫力のバトル。

そして「機動戦士ガンダムＭＳイグルー」シリーズのようなシリアスな展開や数多くの歴史の表舞台には顔を出さない試作兵器を登場させるつもりです！！

プロローグ「インフィロット」

遂にこの日が来たんだ…！

六年の間技術学校に通って、僕は念願の時空管理局の局員になれました。

正確には管理局発祥の地「ミッドチルダ」の地上本部です。

時空管理局……

幾多も存在する次元世界を統括、管理することで次元世界の治安を守る警察と裁判所が一緒になったような組織です。

僕はある事をきっかけに時空管理局に強い憧れを持つようになりました。

でも、魔力を持たない自分に何か出来る事はあるんだろうか…

そう考えて選んだ道が「技術士官」への道でした。

管理世界の治安維持や犯罪者への対処の為に、管理局には沢山の新技術や新デバイスが送られてきます。

技術士官はそんな新技術等を観察、試験調査と同時にその場での誤差の調整を行うのが仕事です。

影ながらも戦う魔導士達を支える重要な役職だと僕は信じています。

あ、申し遅れました！僕の名前は……

「ツバサ・ヤマザキ技術二尉、本日付で地上本部技術試験課へ配属となりました！！
まだ色々と解らない事もあるかもしれませんが、全力で頑張らせていただきます！！」

中学生ぐらいの少年が初々しくまだ着慣れていない制服をわずかに正すと技術試験課の総監「シド・ジョナサン」に敬礼したまま挨拶する。

「なかなか若いな、君は。
君ぐらいの年の子の配属はかなり珍しいが…何か理由があるのかね？」

シドは無骨な風貌ながら大人の優しさを持った声でツバサに聞く。

「はいっ！魔力を持たない自分にとって、何か出来る事は無いのかと考えて選んだ結果であります！！
それに、新技術を安全に魔導士達が使うためには、とても重要な役職だと信じております！！」

ツバサの目に全く嘘は感じられなかった。
それを見たシドは僅かに頬を緩め、ツバサにこう告げた。

「良かろう。
君の配属先は第６３技術試験隊「インフィロット」だ。

それと、もう一つ。現実とはかなり厳しい物だ。子供には解らんかもしれないが、理想と現実の違いで悩んだりはしない事だな……。」

「この扉を開ければインフィロット隊のメンバーがいるのか……どんな人がいるんだろう…年上ばっかりだったらどうしよう……」

緊張と不安に苛まれながらツバサは恐る恐る扉に手をかけ、ゆっくりと引いた。

すると何かが炸裂する音がし、ツバサの顔に紙吹雪やら長いテープやらが降りかかってきた。

「うわっ！？」

ツバサは最初は何なのか判らず驚いたが、しばらくするとそれが宴会などに用いるクラッカーである事に気付いた。

『ようこそ！！インフィロット隊へ！！』

するとそんなツバサの目の前に二人のツバサよりは五歳程年上な女性が笑顔でツバサを歓迎した。

「私はレイカ・リタ・ハーレス♪」

焦げ茶色のツインテールの髪をした女性が言う。

「私はシェリス・リア・ハーレス、私達は姉妹なんだよ♪」
続いて水色のロングヘアーの女性がツバサに言う。
「え…えと…その……」
「やれやれ、驚かせてるじゃないか。」
あたふたしているツバサを見かねて緑色でショートヘアーの女性がハーレス姉妹に言う。
「こういう歓迎は苦手だったかな？
私はナヴィ・クレセント。このインフィロット隊で副隊長をしているよ。
ほら、アルティも恥ずかしがらないで顔を出さないかい。ちょうど年も近いぞ？」
ナヴィと名乗った女性はツバサに言いながら自身の後ろに隠れるツバサより僅かに年下な感じの少女に言う。
「あ…アルティ・フェイアラン一等陸士です……」
赤髪でサイドテールをしているその少女はツバサに挨拶した。
「うん、よろしくお願いします。」
ツバサはアルティに少し笑いながら挨拶した。
「あ、もう来てたんだ。今日付の新人。」

すると扉が開き、地上本部の制服とは異なる作業用の制服を着たツバサにかなり年の近そうな少年がやってきた。

「どうも、整備士のカズ・オリハラです。
一応はデバイスマイスターの資格も持ってまーす♪」

年相応の活発そうな声でツバサに挨拶する。

「あ、こちらこそどうも……」

ちょっとツバサとは温度差があるみたいだ。

「ふむ、これでインフィロットのメンバーは全員集まったな。」

すると1人の男性が椅子に座ったまま全員に言った。

「改めてツバサ・ヤマザキ技術二尉、我が第６３技術試験隊「インフィロット」へようこそ。
私がこのインフィロット隊の隊長のエレン・シュナイダー三等陸佐だ。
これからよろしく頼むぞ。」

エレンと名乗った男性はツバサに緩やかな笑みを向けて言った。

「は…はいっ！！精一杯頑張らせていただきます！！」

予想を思いっきり翻す程のインフィロット隊の面々の若さや優しさにツバサは驚いていたが、エレンの言葉で我を戻してビシッと敬礼し直した。

これから、ツバサ、そしてインフィロット隊のメンバーや様々な試作兵器達の物語が始まる……

プロローグ「インフィロット」（後書き）

次回、「ヨルムンガンド」

眠れる大蛇が今、目を覚ます……

第一話「ヨルムンガンド」（前書き）

時空管理局本局から試作兵器を受理したツバサに、ある脅威が迫る……

今回はシリアス多めです。

第一話「ヨルムンガンド」

「さて、新しく編成された63技術試験隊「インフィロット」だが……諸君等にはとても期待しているよ。」

技術本部長「シド・ジョナサン」二等陸佐に呼び出されたツバサはシドの話を聞いていた。

「はっ！真に価値ある技術は正当に評価される物であると信じています！！」

ツバサはシドの言葉にそう返した。

「うむ、我々は近年違法研究者等の援助により過激化しつつある次元犯罪者達への対処のため、一刻も早く最前線で働く局員達に新技術を送り込んでやらねばならん。」

両手に顎を置き、肘をテーブルにつきながらシドは話を続ける。

「そこで、諸君等に初の任務としてこれを託す。」

そう言ってシドは空間モニターにある映像を映し出した。

「こ…これは……っ！？」

それを見たツバサは非常に驚愕していた。

管理局所属のＬ級物資輸送艦「ヨーツンヘイム」。
かつては連絡貨物船として管理局には属していなかったが次元航行艦の数にも悩んでいた管理局により改良を受けて配備された物である。
塗装は全体に迷彩柄を施しており、前方に僅かに飛び出た艦橋（ブリッジ）以外のほとんどが物資輸送用のコンテナで出来ている。
武装には牽制程度の物しか存在しておらず、元から足の遅い艦である事もありこの艦での輸送は少し危険を伴っている。

「…さて、ツバサ・ヤマザキ技術二尉…だったかな？
今回の荷物について話を聞きたいのだが…」
そう言って艦橋（ブリッジ）の艦長席を回してヨーツンヘイムの艦長「アレックス・プロノフ」二等陸佐相当官がツバサに振り向いた。

「解りました。ご説明します。
試作対艦砲撃端末「ヨルムンガンド」。
敵主力艦をその射程外から狙い撃つ大蛇です。
ＣＷ－ＱＣＸ７６Ａ、カレドヴルフ・テクニクス社製であります。
打撃力の秘密は、術者の魔力を端末内部で瞬間編成し、硬体破壊砲に変換して出力することです。
有効射程距離は３０キロメートル、打撃力は最低でもＬ級巡行艦の主砲の１０倍以上、１キロメートル以内になるとアルカンシェルと同等の破壊力を得ます。」

ツバサはプロノフ艦長にそう告げた。

「へぇ！そいつぁすげぇな！！」

すると突然ツバサの目の前に空間モニターが出現し、紫色のロングヘアーの女性が映し出された。

「リリス・ヘイル」一等陸尉、ヨーツンヘイムの砲術長を担当する男勝りな女性である。

「うわぁ！？」

「おっと、驚かせちまったか。
あーもったいねぇ、アタシに使わせてくれよ～…」

突然の事なので驚いたツバサに半泣き状態になりながらヘイルが頼み込むように言う。

「それはさすがに無理ですよ……！？」

苦笑いしながらツバサがヘイルに言った途端、突如艦内が激しく揺れた。

「艦長！！次元盗賊団の襲撃です！！
敵艦、L級巡行艦2隻！！」

「総員戦闘配置！！敵艦に牽制を加えながら後退して友軍からの増援を待て！！
……こんな時に限ってこの辺をうろつく連中に見つかるとは……！！」

通信士から現状の情報が届くとプロノフ艦長は悪態をつきながら命令を出す。

「艦長！！アタシ達にも撃たせろ！！」

すると突然プロノフ艦長の目の前に空間モニターが出現し、1人の女性の姿が映る。

「…ヘイル砲術長…本艦は退避行動中で前方の主砲は使えんのだ……」

「だがこの艦じゃすぐに追い付かれる！！
増援なんか待ってる暇はないんだよ！！
何のための大砲屋なんだよ！？」

ヘイルは男勝りな口調で艦長に抗議する。

「艦長、ヘイル砲術長の言っている事はかなり正論であります。地上本部が事に気付き、部隊をよこすまでの時間、本艦では耐えきれないと判断します…」

ツバサは論理的に考えて艦長に告げた。

「しかし、本艦の主砲ではL級には太刀打ち出来ないのだ…」

「…「大蛇」を呼び起こしますよ…。」

艦長の言葉に若干冷や汗を書きながらツバサはそう返し、ヘイル砲術長を空間モニター越しに見据えた。

「サーチャーの全機、指定位置に到着……
これより、ヨルムンガンドの実戦運用試験を開始します！！」

ツバサは空間モニターを操りながら言う。

そのモニターには迷彩柄のバリアジャケットを身にまとい、人間と比べると僅かに大きい巨大な砲身を構えるヘイル砲術長の姿があった。

何と、砲術長はヨルムンガンドを抱えたままヨーツンヘイムの艦橋の上に佇立していた。

ヘイル砲術長の周りには監視、管理目的のために存在するサーチャーと呼ばれる監視ユニットが複数浮遊していた。

「…よし！！配置に着いたぞ！！今なら連中の有効射程外から狙え撃てる！！
ヘッ…訳の解らねえ艦に乗せられて、実戦にも出れないかとヒヤヒヤしてたぜ…！！」

ヘイル砲術長はツバサにそう言った。

「それでは、初弾発射後に射撃プログラムの改善と瞬間冷却を開始しますので砲術長は気にせず次弾の装填を！！」

空中を飛ぶサーチャーから映される映像を見ながらツバサはヘイル

砲術長に言う。

「任せな！！一発目から仕留めてやる！！」

するとヨルムンガンドの後部に左右に突き出た部分から円筒形の小さなものが転がってヨルムンガンドの砲身へと入った。

つい最近取り入れられたばかりの「カートリッジシステム」と呼ばれる物である。

ヨルムンガンドは絶大な攻撃力の反面異常なまでに運用者から魔力を吸い尽くしてしまうまさに大蛇と呼べる代物である。

それに対応するためにカートリッジ内に補充してある魔力を炸裂させ、運用者への負担を減らすのがこの場合のカートリッジシステムの利用法である。

「初弾装填！！ぶっ放してやるぜ！！」

そう言うと砲術長はヨルムンガンドの砲身を2隻のL級巡行艦の内1隻に向ける。

運用者の魔力とカートリッジによる魔力が端末内部で瞬間的に編成され、砲門に圧縮されたエネルギーが球体になって集まっていく。

そしてヘイル砲術長が現れたトリガーに手をかけ、その引き金を引いた。

すると圧縮されていたエネルギー体が一気に解放され、魔力とは異なる一種のエネルギー砲と化して敵艦へと直進していった。

エネルギー砲は僅かに敵艦を逸れた物の、あまりの膨大なエネルギーが空間湾曲を作り出し、そこに吸い込まれるように消え失せた。

「す…すげぇ……

初弾、右に逸れたが余波によるダメージで撃破完了！！

技術屋！！さっさと修正よろしくな！！」

ヨルムンガンドは即座に冷却のために冷気を噴出させ、ヘイル砲術長は次のカートリッジリロードを行いながらツバサに言う。

「了解しました！！頼むよワーカー。」

『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．』

ツバサはヘイルに返すと右手に付けてある黒い腕輪に話し掛けた。

すると腕輪から機械音が聞こえると空間モニターに修正部位を打ち込んでヨルムンガンドに情報を送信した。

「砲術長！！射撃プログラムの修正、完了しました！！」

「…了解…！！…次弾装填！！」

ツバサの声にヘイルが返すのだが様子がおかしかった。

「くそ…本当にバケモンだよコイツは……」

カートリッジの魔力があったにも関わらず、ヨルムンガンドはヘイルの魔力すら食らいつくしていたのだ。

全身から汗を流し、疲労感を感じながらもヘイルは再び引き金に手

をかける。

荒く息をしながら朦朧とする視界の中、何とか照準を敵艦に合わせ、トリガーを引いた。

再び眠れる大蛇が牙を剥いた。

しかし、やはり焦点が合わないまま放ったため、第二射は大きく外れ、空間湾曲によるダメージも僅かにしか及ばなかった。

「外れた？…まさか射撃プログラムの修正が上手く出来ていなかった……？

……！！砲術長！！」

空間モニターに様々な観測データを映し出している中に紛れ込んでいたサーチャーから映し出された映像を見てツバサは驚愕した。

ヘイルはヨルムンガンドを落とし、その場に倒れ込んでしまっていたのだ。

「く…そ……動けよ……」

大蛇にほぼ全ての魔力が食らいつくされてしまっていたのだ。

無駄に長い髪が視界を遮り、左手でそれを拭う。

すると彼女の視界には教科書でしか見た事のないような物が映りこんだ。

対空誘導弾（ミサイル）、時空管理局によって厳しく運用を管理されている「質量兵器」と呼ばれる物であった。

次元犯罪者の中には質量兵器を運用する連中も多く、今回の場合L級巡行艦にミサイルを搭載させていたようだ。

ミサイルはヨーツンヘイムと艦橋に立つヘイルに降り注ぎ、寛大なダメージを与えた。

「質量兵器…！？

砲術長！！もうすぐ救援が来ます！！早く艦内に避難してください！！」

ツバサは空間モニター越しにヘイルに呼びかけた。

「ヘッ……動きたくても……動けんよ……」

ミサイルの攻撃により、ヘイルは頭から血を流し、左腕は消え去ってしまっていた。

「それに……今からじゃ……間に合わない……ヘヘッ、敵さんも慌ててやがる……」

ヘイルの言う通り敵艦はさらに魔力砲撃をこちらに放ってきているが全てが見当違いの方向に飛んでいたのだ。

「見せて…やろうじゃねぇか……大砲屋の底力を……！！」

そう言ってヘイルは再びヨルムンガンドを構えて三回目のカートリッジリロードを行った。

「砲術長！！これ以上の砲撃は無茶です！！体が持ちません！！」

「うるさい！！家のクルーは誰１人死なせはしないんだよ！！」
ヘイルは流れ出る血で視界が奪われ、荒い息を吐きながら精一杯の言葉をツバサに言った。
「さあて……ぶっ放すぜ……」
その一瞬だけ、ヘイルの視界が異常にはっきりとし、一ミリの誤差もなく迫り来るＬ級巡行艦を照準に収めた。
三度目に剥かれた大蛇の牙はＬ級巡行艦を見事なまでに貫き、轟沈させた。
「砲術長！！」
サーチャーが故障をきたして映像が途絶えてしまい、ツバサは空間モニターに向かって叫んだ。
「ふむ…あの状況ではヨルムンガンドの放棄も致し方ない……。しかし、本艦の乗員を見捨てはしない！！救助隊をすぐさま艦橋に向かわせろ！！」
艦長は艦長席から立ち上がって命令を告げた。
ＣＷ－ＱＣＸ７６Ａ、試作対艦砲撃端末「ヨルムンガンド」技術試

験報告書。

私、ツバサ・ヤマザキ技術二尉は、新暦６５年５月２１日、本局よりこの兵器を受理しました。

しかし、地上本部へ輸送途中に次元犯罪者集団のＬ級巡行艦２隻と遭遇、遭遇戦に発展してしまいました。

この遭遇戦において、輸送艦「ヨーツンヘイム」の砲術長「リリス・ヘイル」一等陸尉と私による判断でヨルムンガンドの実戦運用試験を敢行しました。

この戦闘において、ヨルムンガンドは計三発の砲弾を放ち、見事Ｌ級巡行艦２隻を轟沈させました。

しかし、大蛇の名の通り運用者の魔力を食らいつくす事、そして敵艦からの攻撃によりヘイル一等陸尉は二年間の療養を余儀なくされました。

この異常な程の燃費の悪ささえ改善すれば実戦にも充分運用出来る物と判断します。

新暦６５年５月２１日、ツバサ・ヤマザキ技術二尉……

因みに、ヨルムンガンドに用いられた「魔力を瞬間編成、硬体破壊砲に変換する」技術は１５年の時を経てカレドヴルフ社ＡＥＣ兵器「ＣＷ－ＡＥＣ０２ＥＸストライクカノン」に受け継がれる事になる……

第一話「ヨルムンガンド」（後書き）

試作兵器のアイデアを募集しています！！
感想などにどしどし書いていってください！！

第二話「ゴッドガントレット」（前書き）

戦闘一切なしの会話パートだけです。

また、一部の版権キャラの名前が登場します。

第二話「ゴッドガントレット」

今回もツバサは技術本部長に呼ばれていた。
しかも今回はインフィロット隊全員が召集されていた。

「――――さて、そろそろ話を始めるか。」

全員が揃った事を確認すると技術本部長のシドは口を開いた。

「今回の任務を説明する。諸君達第６３技術試験隊「インフィロット」はある研究所へと潜入して捜査任務に当たる。」

「捜査任務？試作兵器の試験ではなく…？」

シドの話に１人疑問を持ったツバサが聞いた。

「うむ…
残念ながら地上本部も人員が不足していてな。
たまに我々のような課にも召集がかかる事があるのだ。
ただ…めったな事がない限り呼ばれはしないがな。」

ツバサの問いにシドは目を閉じながら答えた。

「本部長、つまり今回の任務にはそれほどの人員を必要とする何かが……」

今度はインフィロットの部隊長のエレンが聞いた。

「嫌、我々だからこそ必要なのだろう……

――――諸君達は「戦闘機人」と言う物を知っておるかね？」

シドはエレンに答えつつ全員に聞いてみた。
しかし、誰もが顔を見合わせた後首を振った。

「――――やはりそこから説明が必要か……
ツバサ二尉、人造魔導士は知っておるな？」

シドは目を開き、ツバサに顔を向けた。

「はい…確か…
遺伝子操作や薬物投与などに寄って人工的に優秀な魔導士を造り出す技術で、現在は違法研究に指定されています。」

ツバサは教科書で習った事を思い出しながらすらすらとシドに答えた。

「その通り、正解だ。
戦闘機人とはその技術が応用された違法研究の集大成とも呼べる技術だ。
昔、ある研究者が人間に機械を移植して身体機能を強化させようとした。
しかし、人間の体は機械を受け入れず拒否反応を起こしてしまった。
そういった経緯で一度はこの研究は中止となった。
ただ、別のある研究者がその技術を完成させてしまったのだ……何故だかわかるかね？」

長々とした話の後、シドは皆に聞いた。

「そうか！遺伝子操作で機械を受け入れるようにしたんだ！！」

機械に詳しいインフィロット隊の整備士のカズが答えた。
「その通り、世界的にも最も危険とされる違法研究者「ジェイル・スカリエッティ」は人造魔導士に目を付け、それから機械を移植させた……
これにより、人間を機械へと改造する戦闘機人が出来上がった訳だ。」
シドは再び目をつぶり、両手を顎に置いて肘をつきながら言った。
「確かに、これは私達の仕事になりますね。」
「技術関係に詳しい技術試験課なら捜査もはかどりますからね。」
レイカ、シェリスのハーレス姉妹は納得しながらシドに言った。
「その通り、しかし我々ではもしもの戦闘では力不足となる。
そこで、今回は地上本部からゼスト・グランガイツ一等空尉率いるゼスト隊が協力してくれる事となる。」
「ゼスト隊…それほど今回の任務は危険を伴うのですか…」
エレンがシドに返した。
ゼスト隊と言えば地上本部の首都防衛隊の中でも五本の指に入るほどの実力を持つ部隊なのである。
「うむ。そうなるな…
それと、ヤマザキ二尉。」

任務の内容を頭に念入りに記憶しておこうと思いながら考えていたためツバサは不意を突かれたようにシドに振り向く。

「ゼスト隊のクイント・ナカジマ准陸尉と言う女性にこれを渡してきて貰えないだろうか？」

そう言ってシドは空間モニターに機械的な籠手のような物を映し出した。

「…これは？」

「近接戦闘用の試作デバイス、名を「ゴッドガントレット」…ナカジマ准尉は現在自身のデバイスを修理中であってな。修理が完了するための代用品だよ。」

代用品…その単語を聞くとツバサはそれが何を指すかを察した。

「つまり、この試作デバイスに未来は無いわけですね……」

「残念だがそうなる…格闘用のデバイスはそう簡単に使用用途が無くてな。ナカジマ准尉のようなシューティングアーツの使い手辺りにしか使いこなせないのだよ。」

「…了解…」

未来が既に閉ざされている試作兵器…ツバサは唇を噛み締め、拳に力が入っていた。

第二話「ゴッドガントレット」（後書き）

ゴッドガントレットの活躍は次回となります。

ツバサ達インフィロット隊がゼスト隊と共に調査する事になる「戦闘機人」とは……

次回「タイプ・ゼロ」

第三話「タイプ・ゼロ」（前書き）

ゼスト隊の登場です！

また、名前は明かされませんがナカジマ姉妹やガジェットドローンも登場します！！

第三話「タイプ・ゼロ」

今の気持ちを何と表せばいいのだろうか…

とりあえず、泣きたい…今にも泣き出したい…

どうしてこうなってしまったのだろうか…

「…（泣）」

「嫌～♪やっぱり相変わらず似合ってるわ～♪」

僕は今…女装させられてます…

白を基調とした感じのメイド服です。

僕に女装をさせているこの女性の名前はクイント・ナカジマ准陸尉。

実は僕の実家のお隣さんです。

僕の両親は時空管理局の中でも位の高い執務官であるため仕事から帰って来ない日が多く、そんな日にはいつもお隣のナカジマ家にお世話になっていました。

子供に恵まれないナカジマ夫婦はそんな僕をまるで我が子のように受け入れてくださっていました。

ただ……

「女装だけは止めて下さいっていつも言ってるじゃないですかーーーッ！！（泣）」

「まあまあ、意外と似合ってるよツバサ♪」

「うぅ…レイカさんまで…（泣）」

しかもインフィロット隊のメンバーの前でさせられるなんて…（泣）

「…お前、その道で金稼げるぞ？（笑）」

ニヤニヤ笑いながらカズが言ってきた。なんだかムカつく…

「わぁ…／／／／」

ちょっとアルティ！？そこは何で見とれてるのーーーッ！？

「…ドンマイ。」

その冷静さが痛いですシェリスさん！！（泣）

不幸中の幸いでエレン隊長とナヴィ副隊長はゼスト隊長と話をしていたためにこの惨劇を目撃する事はありませんでした。

しかし…

「この子がいつも言ってたツバサって子？スッゴく可愛いじゃないの♪」

クイントさんの同僚の紫色のロングヘアーの女性、メガーヌ・アルピーノ准陸尉にもそんな姿を晒してしまった…もう死にたいです（泣）

それから数分後、隊長陣の話し合いが終了したようで、僕等はブリーフィングに向かいました。
もちろんこの時には服は元に戻してあります。

「今回の作戦を説明しておく。良く聞いて欲しい。」

この茶髪のガッチリした男性こそミッドチルダ首都航空隊最強のストライカー、ゼスト・グランガイツ一等空尉である。

「今回我々は第三管理世界『ヴァイゼン』のある研究施設へと向かう。
我々は『戦闘機人プラント』と仮に名付けている。
そこでいくつかのチームに別れて調査活動を行う。
何か見つけ次第連絡しろ。
その連絡網の役割はツバサ二尉、君に委ねる。」

「え…は、はいっ！！」

僕は魔力を持ち合わせていないため実際の現場では足手まといになりかねない。
そんな僕でも出来る事を探して見つけた物の一つには通信・管制があった。

おそらくエレン隊長がゼスト隊長に話してくださったのだろう。
「では各員は準備が整い次第ここに再び集合しろ。
全員が集まり次第ヴァイゼンに向かうぞ。」
ゼスト隊長の言葉が終わると共に、隊員達はブリーフィングルームを後にした。

第三管理世界『ヴァイゼン』…
数多くの鉱山がある数少ない資源採掘世界である。
ここの深い森の中に非常に目立たないように造られた建物が存在していた。
捜査員もよくこんな場所を見つけられた物だ…
「凄いでしょ？私とメガーヌで見つけたの。」
「そうなんですか？」
まるで僕の心を読んでいるようにクイントさんが話しかけてきたので一瞬驚いた。
「ここって人とかはいないんですか？」

「うーん…一応調べたけど人がいる気配は無いみたい。どうやらもぬけの殻みたいなんだけど…まあ何か無いか探してみようって感じなだけかな？」

今度はメガーヌさんが答えてくれた。
どうやら戦闘機人についての調査はあまり上手く進んではいないようだ。

僕は一応クイントさんとメガーヌさんに同行しつつ全体の通信・管制を一手に担っている。

魔法を扱えない分、こっちの分野で必死に努力したためこのぐらいならどうって事はない。

通路の一角一角で立ち止まっては辺りを見回し、安全を確認すれば次の区画へ。
何も無いままただそれだけの作業が永遠と続く。
そう思っていたその時、

「危ない！伏せて！！」

クイントさんが叫んだ途端、突然レーザーが僕等に襲いかかった。
レーザーを放ったのはカプセルのような形をした浮遊するロボットであった。

「くっ…まだ試した事も無いんだけど…！！」

そう言ってクイントさんは足にはローラーブーツ、右腕には試作デバイス『ゴッドガントレット』を装着し、独特なファイティングポ

ーズを取る。

これが彼女の得意とする格闘技『シューティングアーツ』の構えである。

「数が多い…ツバサ！！応援は頼んでる！？」

「とっくにやってますが…ジャミングが激しくて上手く繋がりません！！」

あのカプセル型のロボットの群れから何かが張られているようだ…

「仕方ない…派手に暴れて目立つしかない！！」

それは敵の増援を呼ぶかもしれない無謀な作戦だが逆に味方が騒動に早く気付くチャンスでもあった。

メガーヌさんも複数のロボットをチェーンのような形をしたバインドで縛り付け、クナイのような形をした魔力弾を放ってロボットを次々機能停止させていく。

「はあぁ！！」

ゴッドガントレットの鋼鉄の拳がロボットを粉砕していく。

「ゴッド！！フィンガー！！」

クイントさんの叫びと共に右腕に魔力が集中し、熱量へと変換、ロボットを溶断破壊する一撃が放たれる。

するとロボット達からワイヤーのような物が現れ、クイントさんの右腕に巻き付いた。

「クイントさん！？」

「大丈夫、問題ないわ、クイントなら。」

余裕そうにメガーヌさんが言った。

するとクイントさんは右腕をゆっくりと後ろに下げ、深い深呼吸をすると勢い良く拳を前に打ち出した。

すると彼女の右腕を縛り付けていたワイヤーが外れ、その勢いで無数の敵を薙ぎ倒した。

「す…すごい…」

「あれが彼女の束縛されぬ拳…アンチェインナックルよ。」

メガーヌさんがさっきの技を説明してくれた。

その後しばらくすると真っ先に気付いたゼスト隊長が駆けつけ、ロボットは全滅した。

そうした騒動もあったが再び調査が再開される。

するとまたガサッと物音が聞こえ、僕等は不意に身構えた。

しかしそこにいたのは先程のロボットではなく、青い髪の二人の小さな少女であった。

「子供…？」

「見た所5、6歳辺りかな…？」

少女達を見つけた僕とメガーヌさんが言った。

「クイントさん！少女二名を保護しました！！
何だかあなたにとても似てますよ。」

僕はちょっと笑いながらクイントさんに言った。

「本当？とりあえず隊長達に連絡頼むわ。」

「了解！！」

最後の最後にちょっと微笑ましい事になったが今回も結局あのロボットとの交戦と二人の少女以外は目立った収穫がなかった。

ゴッドガントレットも帰還すると同時にその役割を終え、廃棄されてしまった…

後日、検査の結果、遺伝子情報がクイントさんに非常に酷似してい

たらしく、クイントさんは二人を快く自身の娘として引き取った。

そう、あの時はまだ解っていなかったのだ…彼女達が非常に重要な存在であった事に……

第三話「タイプ・ゼロ」（後書き）

次回「ガジェットドローン」

第四話「ガジェットドローン」（前書き）

久しぶりの更新ですみません！！

第四話「ガジェットドローン」

他の課とは違い、技術試験課の隊舎は少々異質である。
隊舎の中に研究施設や工業施設を兼ね備えているため、中に入る際には一切の雑菌や異物の混入も許されていないのだ。
よって、隊舎に入るためには徹底した殺菌、消毒、衣服や体の洗浄を受ける必要があり、厳重なチェックをくぐり抜けてようやく入舎が可能となる。
そんなチェックを抜けた先の研究施設の一室で、ツバサとカズは空間モニターに映るある物を眺めながら頭を抱えていた。

「…これは…ヤバいんじゃないか？」

先に口を開いたのはカズであった。

「うん…もしこれが量産されたりしたら…大変な事になる…」

ツバサが続ける。
二人が見ていたデータとは、先日第三管理世界「ヴァイゼン」の森林の中に密かに建造されていた施設の中で彼らに襲いかかってきたカプセル型ロボットの物であった。
管理局内で「ガジェットドローン」と仮の名称を付けられる事になるそれは、二人の予想では現段階では試作段階、もしくはレプリカではないかと思われるが、そのデータには驚くべき機能が記されていた。

「アンチ・マギリンク・フィールド」…ＡＭＦの略称で呼ばれるＡ（トリ）Ａ（プルエー）ランクの高度な魔法防御を発生させる事が可能である事が判明したのだ。

ＡＭＦの領域内では魔力の結合、効果が無効化されてしまう。
さらに複数の機体が集まれば効果も拡大し、計算上では地上本部内の全魔導士を無力化する事さえ可能らしい。
また、先日の戦いの中でクイント・ナカジマ准陸尉の右腕を巻き付けたコードのような物は、物体を持つこと、果てには電子機器のハッキングまで可能だそうだ。
「こんな物を造れるくらいの次元犯罪者…まさか…」
ジェイル・スカリエッティ…とカズは小さく呟いた。

――――――――――――――――

場所は変わり、技術試験課を束ねるシド・ジョナサン技術本部長の前にツバサはやってきていた。
「――――以上が、ガジェットの調査結果であります。
結果として、これの量産、もしくは改良がなされた場合、管理局に決定的な大打撃を与える事が出来てしまいます…」
ツバサが報告を終えると、「ふむ…」と呟き、シドは両手に顎をのせ考える仕草を見せた後、その重い口を開いた。
「確かに、この兵器は我々の脅威となり得る物だな…。
やはり、魔力に依存しない新兵器の開発を急がねばなるまいな…。
技術ニ尉、インフィロット隊にはとても期待しておる。これからも何かあれば私に報告してくれたまえ。」

「…了解いたしました！！」

ツバサはそう答え、敬礼を終えた後、本部長室を後にした。
その時、ツバサは心の中である決意を固めていた。

――――――――――――――――

長い一日が終わりを迎えようとする夜中、今日も両親は家に帰って来れないため、ツバサは自宅を通り過ぎ、お隣のナカジマ家に世話になりに向かう。
その時、家の前に着くとナカジマ家の中が妙に騒がしい事に気付いた。
しかし、ツバサはあまり気に止めず、ナカジマ家のインターホンを押す。

「すみませーん。ツバサですー！」

『はいはーい、今鍵開けるからー。』

2、3日に一回、または連日ナカジマ家に世話になっているため、現在ではこの程度のやり取りで済んでいる。

自動ロックが解除された事を確認し、ツバサはドアを開けて家に入る。

「ちょっとリビングにおいで。紹介したい子達がいるの。」

するとリビングからクイントの声が聞こえてきたため、ツバサは首を傾げながらリビングのドアを開けた。

「ほーら二人共、お兄ちゃんに挨拶しなさい？」

クイントは笑顔で自分の後ろに隠れる二人の少女に言った。

「ギンガです…ギンガ・ナカジマ…こっちが妹のスバルです。」

クイントの後ろから顔を出し、恥ずかしそうにギンガと名乗る少女は言った。

ツバサは二人を見て驚いていた。

なぜなら二人は先日ヴァイゼンの施設の中で保護した少女達であったのだ。

「ど、どうしてここに！？」

ツバサは驚きを隠せない顔のままクイントに聞いた。

「それがね、遺伝子検査を行ったら何と私とほぼ一致したらしくって、二人の保護監察官に任命されたのよ。名前も私が付けたの。」

クイントは笑顔でそう答えた。

―そう言えば、子供が欲しいって言ってたな…

嬉しそうなクイントの顔を見てツバサはそう思い返していた。

自分を温かく迎え入れてくれた時もこんな表情をしていた。本当に嬉しくて仕方がないのだろう。

しかし、ツバサはほとぼりが冷めた辺りに急に真剣な表情になり、口を開いた。

「クイントさん…実はお願いがあります。」

ツバサの真剣さに気付いたのか、クイントの先程までとはうって違う真剣な表情になることでそれを返事とした。

「僕に…近代格闘技（ストライクアーツ）を教えてください！！」

ツバサの決意…それは魔法が扱えない自分でも強くなるため、そして魔力に依存しない新兵器の開発を目指す技術試験課の中で自分が成すべきと思った唯一の方法であった……

第四話「ガジェットドローン」（後書き）

ツバサ
「今回から、質問コーナーを設ける事になったんですよね？」

エレン
「ああ、我々インフィロット隊や、試作兵器などの質問や、アイデアの募集も兼ねている。」

ナヴィ
「まだエレン隊長や副隊長である私は出番がかなり少ないけど、いつかは試作兵器か何かを扱いたいしね。」

カズ
「もっと凄い機体をいじってみたい…（ワクワク）」

アルティ
「落ち着け落ち着け（汗）」

シェリス
「それはさておき！！」

レイカ
「質問や試作兵器、新キャラのアイデアは随時募集しています！！よろしくお願いします！！」

ツバサ
「次回「ストライクアーツ」…僕だって強くなってみせます！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5574w/

魔法戦記リリカルなのは The technical test team

2011年11月19日10時15分発行